

第 14 回 第 17 章 コストコントロールとしての標準原価計算

<本日のテーマ>

今回も理論問題のテーマになるでしょう。

日商 2 級学習済の方は計算なら簡単にできると思います。

計算論点は、日商簿記 2 級フリーテキスト講座をご覧ください。その前提で練習問題を解説します。

18 回

【第 1 問】 以下の設問に対して、それぞれ 200 字以内で解答しなさい。

問 1 標準原価計算の 4 つの目的および建設業への標準原価計算の適用について説明しなさい

問 2 経営意思決定問題において関連原価となる 2 つの要件を説明しなさい。

目的は、原価管理と記帳の迅速化が書ければそこそこの点は取れると思います。

適用に関しては、建設業の特性（移動型・個別受注型）を書いて適用事例は少ないが重要な技法である、ということが書ければ大丈夫です。

22 回

【第 1 問】 次の設問に対して、それぞれ 200 字以内で解答しなさい。

問 1 工事間接費予算の設定方式の 1 つである変動予算方式について説明しなさい。

問 2 標準原価の種類をタイトネス（厳格度）の観点から説明しなさい。

標準原価を構成する要素

単価×消費量×操業度

この観点から、厳密度合いの高いものを中心に記述すればよいでしょう

<単価：もっとも安い価格

<消費量：最高の能率

<操業度：フル稼働

すべてを理想で考えると、現実的には達成不能というあたりも書ければ加点要素あるでしょう

① 標準原価とは？

簡単にいうと目標原価

もともとは工場内の作業の標準時間管理から産まれた考え方

目標は高すぎても（理想的）いけない。低すぎても（甘すぎても）いけない。
科学的統計的に算出されたものであるべき。

標準原価＝目標原価＝目標単価×目標時間×目標操業度

<例>

Iphone を作る価格（直接費だけで考えてみよう）

材料→@2,000 円×0.5kg=1,000 円

労務費→@3,000 円×2 時間=6,000 円

<100 台つくる想定で計画する（操業度を定める）

<工場を 10 日分レンタルした（100,000 円）

固定費→100,000÷100=1,000 円

1 台あたり目標単価→「あるべき原価」＝標準原価
8,000 円

しかし受注不振で 80 台しかつくらなかった
作業効率も悪かった

材料→@2,100 円×0.7kg=1,470 円

労務費→@3,500 円×1.5 時間=5,250 円

固定費→100,000÷80=1,250 円

1 台あたり実際単価 7,970 円

8,000 円の目標が 7,970 円でした。ただ喜ぶだけでいいでしょうか。

材料の 470 円オーバー、固定費の 250 円オーバーを、優秀な作業者が 750 円カバーした結果なのです。

詳細に分析をし、改善につなげることが大事ですね。

② 原価管理概念の変遷

① の事例は、<事後的な原価管理＝伝統的コストコントロール>と呼ばれています
もちろん事前の「目標原価」設定作業はあるが、事後の分析改善に主眼が置かれています。
高度成長時代はこれでも良かったでしょう。少々のミスは受注量の増加と勤勉な社員がカバーしました。

しかし安定成長（聞こえは良いが低成長時代）に入ると、結果が出てからでは遅い状態になります。
従って事前の計画に主眼がおかれることになります。いわゆるコスト

マネジメント論（原価だけでなく経営全体のマネジメントというイメージ）の登場である。

長期的経営計画→利益計画→原価計画→各部門の目標管理（責任会計）→多様な分析手法の必要性

- ③ 標準原価計算の意義
「こうあるべき原価」
予想や期待ではない。科学的統計的な根拠を持つ原価
- ④ 標準原価計算の目的
原価管理（事後管理）
売上原価算定の基礎
予算管理の元になる
記帳の簡略化
- ⑤ 建設業における標準原価計算の可能性
単品生産・移動性ゆえに使われる範囲は限定的
<例>資材の自社生産・定型的作業が仕事の過半

ただ、標準原価計算が成立しうる要素もある

- ① 事前原価計算の積算は一種の原価標準
- ② 事後原価計算の実行予算も一種の原価標準

⑥ 標準原価計算の種類

★対象範囲→(固定費+変動費) (変動費のみ)

★改定頻度→高い(当座標準原価) 低い(基準標準原価)

★厳格度(タイトネス)

理想標準原価(最高能率)(達成は難)

現実的標準原価(比較的良好な能率)(短期的指標)

正常標準原価(異常値排除)(長期的平均)

標準原価算定には<価格><消費量><操業度>が関係するから下記のような組み合わせで厳格度合が決まる

<価格面>

理想価格
予定価格
正常価格

<能率面>

理想消費量
予定消費量
正常消費量

<操業度面>

理想操業度
予定操業度
正常操業度

太字は当座標準原価に使用されるものとして理解できる

テキストでは、<予定価格・達成可能良好能率・短期予定操業度>の組み合わせであらわされているが、達成可能能率や実現可能最大操業度という概念もあるが、そこまですべて対応するのは難しいので、予定で通しても大きな失点にはつながらないであろう。

⑦ 差異分析(固定予算と変動予算) <第13回でも説明済み>

固定予算→固定費の予算ではない。操業度にかかわらず予算が固定化される(景気拡大期に有効な予算)

変動予算→原価を固定費と変動費にわけ、操業度によって変動費を計算する(景気が不透明な時期に有効な予算。複数の予算作成で事務負担が増大)

⑧ 原価差異の会計処理

標準原価で記帳→P L作成

財務諸表は真実でなければならない

原価差額を売上原価または棚卸資産に配分する

<マトメ>

練習問題

17.1

コストコントロール（事後管理・個別管理）→高度成長から安定成長へ→コストマネジメント（事前管理含む全体管理）

17.2

難易度高い

近代的コストコントロール（経営全体のマネジメント）

経営的視点 TOP マネジメント（組織的な調整）とミドルマネジメント（現場管理）

こんなことが書ければよいと思います

17.3

(1)目的→原価管理・利益管理・予算管理・迅速な記帳 あたり

(2)予算原価との相違点→あるべき原価（厳密な原価）

(3)建設業への適用→あまりない（資材の大量生産・定型的作業）

(4)当座標準原価計算のタイトネス（厳格度合い）

（予定価格 × 予定消費量）を予定操業度で管理する

17.4

N材料は難しい（私は間違えました）

17.5 は日商 2 級程度